



バッハの森通信

第 167 号
2025 年
8 月 20 日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail : info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

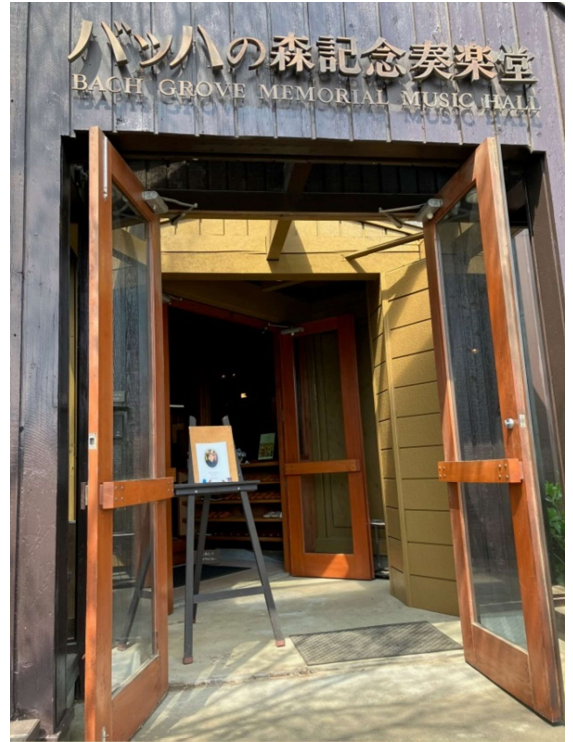
はじめに

バッハの森 副理事長
深谷 律雄

すでにお知らせいたしましたように、一般財団法人バッハの森の創設者・理事長 石田友雄先生は、さる 4 月 2 日に不慮の事故により逝去されました。1985 年のバッハの森の創設以来、夫人でオルガニストの石田一子さんと共に当財団の活動を主導しその精神的支柱であった先生を失ったことは、私たち会員にとって計り知れないほどの損失となりました。しかし、いつとき全てが停まった財団の活動も、会員諸氏の献身と努力によって徐々に動きだし、6 月 29 日には石田先生を記念するコンサートを開くことができました。そして財団の活動を伝える「バッハの森通信」もこうしてお届けできる運びとなりました。

本号は会員の皆さま、および生前の石田先生をよく御存知の方々が、先生との思い出を綴ってくださった原稿を掲載しています。国内外の多くの皆さまが原稿を寄せて下さりました。本当にありがとうございます。

先生亡き後のバッハの森は当面の間、会員の皆さまの自主性と話し合いによって運営されていくことになります。音楽活動や講座のありかた、また財政面を含めて様々な困難を乗り越えていくことになるでしょう。最後に会員の皆さまの積極的な御支援と御協力を乞い、巻頭の御挨拶とさせていただきます。



友雄先生へ

岩淵 倫子

私が初めてバッハの森を訪れたのは、今から 22 年ほど前のことです。それ以前にもバッハの森の存在は認識していましたが、なかなか門を叩くことができず、建物の外観だけを確かめて帰宅したこともあり。前年に就職し、当時はそれまでの学生生活と職業生活との差に落胆する日々でした。志していた音楽教師になることができたとはいえ、自らが歌う場や機会がないことに大きな不満を抱いていました。それが限界に達した 2003 年のクリスマス、意を決して家族向けのコンサートに伺いました。

穏やかで心温まるクリスマスの音楽の中、言い知れぬ思いが涙となって溢れました。号泣する私の姿は先生方のお目にも留まるところだったのでしょう。その後の祝会に混ぜていただいたり、この日のことを通信に書かないか、とお声をかけていただいたりして、バッハの森の仲間に入れていただくことになったのです。

この日は私の人生の転機です。

それからの 21 年間、今までに通ったどの学校よりも長い間、バッハの森で学ばせていただきました。私にとっての「学びの場」といえばバッハの森で、「先生」といえば、石田友雄先生、一子先生でした。

音楽や聖書、歴史など、教えていただいた内容はもちろんなのですが、それ以上に私は友雄先生から「真に『学ぶ』とはどういうことか」を見せていただいたと思っています。

先生はいつでも、既によくご存じのことだと思うのに、何度も何度もお調べになったり、楽曲を何度も何度もお聴きになったりと、より深く、より適切に解釈できるように研究なさっていました。そして、ご自身が学んだことを私たちにも惜しみなく伝えてくださいました。先生のもとで学ぶ私たちを、「友達」と評して認め、ご自身の懐に入れてくださっていたのも、とても嬉しいことでした。

先生のご研究に向かう姿は、おいくつになってもいつも情熱的で若々しく、楽しそうで、自分自身もこのように年を重ねていきたいと、心から憧れました。友雄先生のご姿勢は、学び手としても教え手としても、理想そのものでした。

バッハの森を訪れることがなければ、きっと私は学ぶ楽しさを忘れ、物事を探究する姿勢を忘れてい

たことでしょう。吸収することをやめ、学びを共有する仲間とも出会うことなく、インプットせずにアウトプットすることばかりを続けていたら…と思うと、寂しさどころか、恐ろしささえ感じます。

友雄先生がご逝去になり、早くも 4 か月が経とうとしています。今はまだ、実感がわからない日も、その不在を大きく感じる日も、両方があるように思います。直後の大きな悲しみや寂しさが過ぎたあと、ふと胸に浮かんだのは「友雄先生とお会いしてお話できないのはなんとつまらないことか」ということです。友雄先生はいつも「知的に生きる喜び」を与えてくれていたのだと、改めて感じています。

バッハの森で、友雄先生や一子先生、共に学ぶたくさんのお仲間に出会い、共に学びや思い、楽しい時間を分かち合えたことは、私にとってかけがえのない宝であり、人生そのものです。先生方が築いてくださったバッハの森と、そこに集う人々との絆をこれからも大切に、友雄先生がメディアツィオで語られていたことの実現を目指して、これからも向上心や向学心を忘れずに歩いていきたいと思えます。

友雄先生、お会いすることができて、本当によかったです。今まで、本当に本当にありがとうございました。

石田友雄教授への追悼

ヤン・エルンスト
マインデルト・ツヴァルトの名においても

2024 年 7 月 28 日、J.S.バッハの 274 回目の命日に、私は再び石田友雄さんに出会いました。これが最後の出会いとなりました。彼はバッハのカンタータ第 112 番「主は我が忠実なる羊飼ひ」の演奏についてコメントしていました。彼の英語による解説文は、その賢明な集中力と深い専門知識により、私に深い感銘を与えました。

そして今日、2025 年 5 月 18 日、私たちはシュヴェリーン大聖堂にて、教会暦のカンタータの主日に、同じバッハの作品を礼拝で演奏しました。私とマインデルト・ツヴァルトにとって、それは石田友雄さんを追悼する日となりました。

彼を思い起こすとき、何が残るのでしょうか？

石田教授は、神学、音楽学、オリエント学といった異なる学問分野を結びつけることのできる、真の

学者でした。彼は情熱的な教師であり、高齢になってもその知識を惜しみなく他者と分かち合っていました。彼はバッハの音楽とプロテスタントのコラールを愛していました。そして彼は、自身のライフワークである「バッハの森」を愛していました。

静寂と集中のための唯一無二の場所「バッハの森」。この音楽と志ある人々との出会いの場所は、私に多くのことを教えてくれました。

私たちは石田友雄さん、そして彼の素晴らしい妻・一子さんに感謝の思いを込めて追悼します。お二人は私たちの心に生き続けます。

(以下ドイツ語原文)

Jan Ernst, auch im Namen von Meinderd Zwart

Am 28. Juli 2024, dem 274. Todestag J. S. Bachs, erlebte ich Tomoo Ishida noch einmal. Ein letztes Mal. Er kommentierte die Aufführung der Bach-Kantate 112 „Der Herr ist mein getreuer Hirt“. Die schriftliche Zusammenfassung auf Englisch beeindruckte mich tief durch ihre kluge Konzentration und das große Fachwissen. Heute, am 18. Mai 2025, führten wir dieselbe Komposition Bachs im Gottesdienst zum Sonntag Kantate im Schweriner Dom auf. Für mich und Meinderd Zwart ein Tag des Gedenkens an Tomoo Ishida.

Was bleibt, wenn ich an ihn denke? Professor Ishida war ein wirklicher Gelehrter, der verschiedene Fachgebiete - Theologie, Musikwissenschaft und Orientalistik - miteinander verbinden konnte. Er war ein leidenschaftlicher Lehrer, der sein Wissen bis ins hohe Alter mit anderen geteilt hat. Er liebte die Musik Bachs und den protestantischen Choral. Und er liebte sein Lebensprojekt: Bach Grove.

Dieser einzigartige Ort der Ruhe und Konzentration, dieser Ort der Musik und der Begegnung mit interessierten Menschen hat mir viel beigebracht.

In Dankbarkeit denken wir an Tomoo Ishida und auch seine wunderbare Frau Kazuko.

Sie bleiben in unseren Herzen.



Jan(右)と Meinderd(左)(2024 年来日時)

二つの言葉

鴨川 華子

私が初めてバッハの森の門を叩いたのは 2012 年の年明けでした。オルガン音楽研究会とコラール研究会を通して多くのことを学ばせていただく中で、特に印象に残っている先生の言葉が二つあります。

一つは「バッハは一人」です。私はチェンバロ奏者として長年バッハ作品に取り組んできましたが、演奏時の心のもちように今一つ自信が持てていませんでした。しかし、バッハの森で学ぶにつれて、世俗と見なされがちなチェンバロ作品にも聖書の内容を見出すことができるようになり、少しずつ自信が湧いてくるのを感じました。そのことを先生に申し上げると大変喜んでくださり、「教会と世俗に別々のバッハがいるわけではありません。‘バッハは一人’です」と朗らかに仰いました。

もう一つは「ぼくはイエスのファン」です。聖書学者である先生がイエス・キリストを語るときに、「ファン」というフランクな言葉が使われたことに驚きましたが、先生の講義がなぜ面白くて温か味があるのか、その一言で腑に落ちました。私の中で聖書の見方が変わった瞬間でもありました。これら二つの言葉は、私の音楽人生の拠り所であり続けると確信しています。

まだ議論が残っています！

菊地 純子

つくばが田舎町で、大学も梨園に囲まれていた頃、エルサレムから直行で大学に来られた先生に、博士課程後期第一期生として出会いました。大いに議論があった大学の開学も詳細にはご存知ではなかったのでしょうか。とにかく前向きに「学問の府」を作っていこうと、「あの馬力」で進まれました。同時に「あのね、文化がない所なら、作っていけばいいのよ。」と聖書館建設と並んで、バツハの森の建設へと向かわれました。ですから初めからのバツハの森の方々とは 50 年の繋がりを持たせていただいています。

その後「君はドイツで勉強してきたら良い。」ということで、6 年半後に日本へ戻ると優秀な後輩たちが何人も待っていました。その後教員として、ご一緒させていただいた「石田研究室」は実に学問への情熱が中心となり、学部生から院生まで活気に溢れ、毎年のように海外から旬の学者が訪れて楽しい議論で溢れました。

友雄先生がエルサレムに勉学に行かれる前に心血を注いで活動されていた「かにた婦人の村」という福祉施設に、ここ数年関わらせていただき、同じ血が流れている場所があることを知り、驚いています。

先生、残った議論は天上で？！

春の日に

熊谷 徹

一度だけ、友雄先生を私的にお訪ねしたことがあります。2008 年の春のことでした。私は「バツハの森」をお休みしていて、ちょっとした用事で先生をお訪ねしました。療養中の一子先生もいらして、お庭で植木のお手入れをされていました。お元気そうなご様子に、とても嬉しい気持ちになったのを覚えています。

友雄先生と一子先生は、お茶を振る舞ってください、お庭の緑に囲まれて、穏やかなひとときを過ごしました。そのときの柔らかな時間と、明るい春の日差しに包まれたお庭の光景は、今も心に深く残っています。

バツハの森での友雄先生は、いつも穏やかでありながら、聖書やコラールの講義のひとつひとつの言葉には、先生が長い時間をかけて探求されてきた深い知識が込められていました。その中には、温かな眼差しと共に、静かな厳しさが感じられることもありました。もしかしたら、私自身が少し緊張していたのかもしれませんが。

ですから、あのときにお茶を振る舞っていただいたことは、私にとってひそやかで、ささやかで、とても大切な思い出です。

石田友雄先生の思い出

小坂橋 又久

先生からは、筑波大学にて、外書講読、旧約聖書概論、エレミヤ書講読の授業を受けました。特に、エレミヤ書講読は、資料の背景にある歴史的事実を追い求める授業で、犯人探しにも似た感覚でした。大学卒業後も、先生から博士論文の指導を受けましたが、色々と学ぶ貴重な時間でした。ご自宅に伺うと、奥様が笑顔で、お茶とお菓子を持っていらっしやいました。先生が携わったバツハの森の活動に積極的に参加することはできませんでしたが、維持会員として支援させていただきました。私がこの活動を「優秀な方がなさる活動ですね」と申し上げましたところ、「優秀な人間はこのような活動をしない」とおっしゃいました。先生にとって、バツハの森は、愛するバツハの音楽を通したコミュニティ活動であり、非常に楽しい活動だったと思います。活動を継続するのは、大変であったと思います。今年の初め、「バツハの森通信 166 号」が届いていたので、先生がお元気なのだろうと思っていましたが、突然の訃報でびっくりです。お会いしなければと思っていたので、非常に残念です。

若き日の石田友雄さん

かにた婦人の村 塩川 成子

(深津文雄の長女)

石田さんは「ガムシャラな激しい性格」(深津記)で、'51 年から'62 年までの 11 年間、彼は「深津

(文雄)さんを師と仰ぎ、彼の後をどこまでもついで回って」(石田記)、私たちを助けてくださった。

石田さんは、早大政経学部2年生の時、早稲田奉仕園で聞いた深津の創世記の講義にすっかり魅了され、深津らの日本聖書学研究所、ヘブライ語講座、三笠宮研究室などに入出入りし、深津の主催するバッハの教会カンタータ講座や、その基になる教会歴にも出会う。早大を卒業後、東京神学大学に学び、'56年の婦人保護施設いずみ寮の開設後は、日曜日ごとに茂呂と大泉のいずみ寮の礼拝も副牧師として補佐し、いずみ寮の礼拝ではオルガニストを務めた。'58年にいずみ寮の寮長代理になると、早稲田奉仕園の後輩に声をかけてワークキャンプを組織、米軍からかまぼこ兵舎をもらい受けて次々と庭に立て、畑、豚舎、鶏舎、洗濯工場、ブロック製造場、ガリ版印刷所などを次々と拓き、「小コロニー」建設に邁進。「ほとんど毎日いずみ寮に泊まり込み、夢中になって働いた日々は感激に満ち溢れていました」と、深津の追悼集に記しています。しかし、'61年の聖書学研究所での発表を機に、深津から「君は学問をやれ」と言われ、'62年春イスラエルに留学することに。

私は、ここ数年、バッハの森でのアドベントや受難週の音楽会に参加してきたが、さすが石田さん、歌詞の奥深い解説を毎回楽しみにしていた。

もう、あの声が聞けないと思うと淋しい。

石田友雄先生への追悼

イド・シャッツ Ido Schatz

私は、少し変わった理由で、そして少し変わった方法で、石田友雄先生と出会いました。私はイスラエル出身の映画監督で、イスラエルの歴史における特異な出来事について脚本を書いています。その出来事に、偶然にも石田先生が関わっていたのです。

1972年、石田さんは日本からの来客を迎えるためにロッド国際空港に向かいました。ところが、そこで彼が目にしたのは、空港が爆破され閉鎖されているという光景でした。それは、イスラエル初期の歴史において最も凄惨なテロ事件の一つでした。驚くべきことに、そのテロリストたちは日本人でした。生き残ったのは、岡本公三という一人だけ。イスラエル当局は彼と意思疎通を図る術がなく、石田さん

に通訳を依頼しました。

石田先生は、その最初の夜の取り調べで唯一の通訳者となり、後の裁判でも主要な通訳者の一人を務めました。

石田先生は、その出来事について、誠実に、率直に、そして温かく語ってくださいました。読み進めるうちに、彼は私の脚本における中心的な視点の一つとなっていきました。彼の立場は非常に特異であり、当時の彼の日記を通じて、あの恐ろしい夜に彼が感じていた思いや考えを知ることができました。私たちの最後のやり取りには返事はありませんでした——理由は明白です。彼の訃報は私にとって大きな衝撃でした。なぜなら私は、彼のことをようやく知り始めたところだったからです——少なくとも、脚本の中の「彼」という存在を。

彼を、イスラエルやユダヤ民族、中東の歴史を記録する歴史家としてだけでなく、自身の形でその歴史の一部となった人物として、敬意を込めて描けたらと願っています。

(以下英語原文)

I've reached sensei Tomoo Ishida in an unusual way for a somewhat unusual reason. I'm a filmmaker from Israel and I'm writing a screenplay about a peculiar event in the history of Israel, an event that Ishida-sensei happened to be a part of.

In 1972, by coincidence, Ishida san arrived at Lod International Airport to pick up a guest from Japan. To his astonishment, he found the airport bombed and closed, following one of the most horrific terrorist attacks in Israel's early history. Surprisingly, the terrorists were Japanese. Only one of them, Kozo Okamoto, survived the attack. Since the Israeli authorities had no way to communicate with him, they asked Tomoo to translate.

Ishida sensei became his sole translator for the first night of the investigation and one of the main translators in the trial later.

Ishida with great kindness, sincerity and straightforwardness shared his story with me. The more I read, the more he became one of the central points of view in my screenplay. His position was quite unique, and through his diary from that period, I learned of his thoughts and feelings during that terrible night.

Our last correspondence went unanswered—for

obvious reasons. his passing came to a shock to me because as I had only just begun to know him—or at least the fictional version of him in my screenplay. I hope I'll be able to honor his memory not only as an historian of Israel, the Jewish people, and the Middle East, but also as someone who has been a part of its history in his own way.

石田友雄先生のこと

～誰も知らない友雄先生と信州～

2025. 6. 29 追悼コンサートに寄せて

正村 寿満子

友雄先生のお父様石田友治先生は、秋田県生まれの牧師・社会活動家として高名な方ですが、お母様は信州の上田市出身。友雄先生の曾祖母様は、上田殿城から正村家から望月へ嫁がれ友雄先生のお母様が誕生。お母様は上田高等女学校（現染谷高校）始まって以来の伝説の才女だったそうです。私の母も上田高女ですので、当時憧れであり、正村家の誇り的な存在だとのこと。そんな優秀なお母様は、大正デモクラシーの影響もあり自立した新しい女性で、上田に講演に来られた石田友治先生の思想や人となりにもゾッコン惚れて、ご夫婦になられ友雄先生が誕生されたそうです。昭和 17 年に友治先生が亡くなり、友雄先生もお母様もご苦労されたと思うのですが、戦時中の一時、親戚の信州戸倉上山田温泉「清風園」に疎開されていたとのこと。当時の事をお聞きしたら、友雄先生は「信州の自然の中で、毎日山や川での遊びや魚釣りなど、良いこともワル？なことも、全てはこのケンちゃん、モリちゃん、ミチタケちゃんに教わった。温泉の芸者さん達にも可愛がってもらって楽しかった。」とおっしゃっていました。当時、笹屋と並ぶ高級旅館の清風園に、親子でずっと居候している訳にもいかず、屋代に家を借りて屋代中学にも少し通ったそうです。

一緒に遊んだというモリちゃん（現在 95 歳）は数年前、「友雄さんは、神童って言われてた。都会から来たせいかもしれんけど、ものすごくよくできてオラ達田舎者は皆おったまげた。一番すごかったのは、ガタイがいい友雄さんが地元の相撲大会で勝った時。その後、土俵の真ん中で基督教の講義を始め、大勢の観客があっけにとられた。僅か 12

歳の子どもが、聖書の教義をスラスラと誦んじ、しかも皆が神妙に聞き入って、それ以来、村中に神童と知れ渡ったんだ。」という話をしてくれました。友雄先生がバッハの森で宗教音楽を交えた基督教の講義をされている原点は、ここにあったのかと妙に納得した私でした。

こう話してくれたモリちゃんは今足腰不自由で遠出ができません。私が平成 3 年筑波大学に教員研修が決まった時「親戚一同で正村の幟を立ててツアーを組んで友雄さん所へ行かなきゃ」と意気込み、私は恥ずかしいからやめて欲しいと思っていて、その後話は立ち消えホッとしましたが、一度は皆元気なうちに実現させてもよかったと後悔もあります。

友雄先生のご結婚は、お父様ご結婚の経緯とよく似ていて（私が以前カトリック教育学会で発表した時、一子先生のお友達のシスター達からお聞きしたことで、一子先生の追悼文にも書いた覚えがありますが）お友達皆が危険な中東情勢も心配して反対したのに、一子先生がゾッコンだったようです。（父子揃って熱烈な女性にモテています）でも、お互いに深い愛で結ばれていらして「夫唱婦随」同じ位の頻度？で「婦唱夫随」でした。数年前、先生のご自宅エリアで一緒にレトルトカレーを頂く機会があった時の事です。友雄先生がフォークを出してきて「一子が、日本人ってカレーにスプーンなのよね。海外はフォークなのよね」とよく言っていた。」とお話しになりました。その言葉からも、亡くなられて十年以上経ても一子先生への変わらぬ深い愛が感じられ、本当に素敵なお夫婦だなあと思いました。その天国の一子先生が見守って下さっているから、友雄先生は百歳までもお元気で、バッハの森の講義を続けて下さるものと信じていたのですが、この度の訃報をお聞きし、残念でたまりません。

願わくば、先生ご夫婦が大事に育てたお子さんのようなこの「バッハの森」が、皆様のご協力により、末永く続くことをお祈り致しております。私も末席の会員の一人として協力していきたいと存じます。また個人的には、友雄先生、一子先生から学んだことを大切に、これからも学びを深め、ベルを振る皆様、それを聴く皆様の「心のお洗濯」ができるようなハンドベルの音色を、この信州で響かせていきたいと決意を新たにしております。

友雄先生・一子先生、今頃天国で久しぶりのご夫婦水入らず第三の？新婚生活を love love で楽しんでいらっしやると思いますが、地上に残された私共

のことも忘れずに、ぜひ応援をお願い申し上げます。

バッハの森での 15 年

鈴木 真粧子

石田友雄先生と初めてお会いしたのは、私が 28 歳の頃でした。今は 43 歳、2 児の母となりました。バッハの森に通い始めたのは、聖書を深く学びたいと思ったからです。当時は 2 階の図書室で、4 つの福音書の読み比べを行いました。難解だった聖書の言葉も、先生の語りによって生き生きとした意味を帯び、私の心に深く迫ってきました。ある時には、ヘブライ語で創世記を読みました。ヘブライ文字の成り立ちから学び始め、「アレフは牛、ベートは二階建ての家なんだよ」と、先生が笑いながら教えてくださいました。面白くて娘にも話しました。バッハの森は、歴史を追体験し、感動を分かち合う場所なのだ実感しました。長年にわたり学術研究を続け、多くの感動を与えてくださった石田友雄先生に、心より感謝申し上げます。この場をお借りして、ご冥福をお祈り申し上げます。

感謝

鈴木 由帆

最後に友雄先生にお会いしたのは、昨年 7 月末のワークショップでした。2014 年秋からクワイアと共にオルガンを弾かせていただきましたが、第二子出産後、週末家を空けることに家族の理解を得ることが難しくなり、一旦お休みしたいと願い出ました。本当は続けたい気持ちが大きく、苦しい決断でした。

先生はいつも意欲に満ちて嘘のない方で、私も先生に対し、自分の考えを率直に伝えるよう努めました。生意気なこともたくさん言ったと思いますが、先生は意見することを喜んでくださり、孫ほどに歳の離れた私を軽んじることはありませんでした。クワイア伴奏に関しては、何度「このカンタータはオルガニスト一人では無理です」と文句を言ったかわかりませんが、その度に「貴女のできる範囲でやってくれば」と笑顔で飄々とおっしゃいました。そう言えば、負けず嫌いな私が必死にやるとわかって

いたに違いありません。ああ悔しいと思いながら、毎回夜中に必死で練習しました。終演後はいつも、「貴女のオルガンはいいねえ」とニコニコ褒めてくださいました。先生のもとで聖書の世界の常識を学ばせていただき、オルガンを弾くことができ、とても幸せでした。

生涯にわたって 変わり続けることのできる方

徐 淑子

私にとって友雄先生（そして、一子先生）とは、「生涯にわたって変わり続けることのできる方」でした。人は誰しも年齢を重ねるにつれて、自分の考え方や行動のし方に変化を起こすことに抵抗を感じがちですが、石田夫妻にはその様子が見受けられず、私はいつも驚いていました。

友雄先生に限って言うと、たとえば、コロナ流行の時には、いち早くメーリングリストを用いて「マニフィカト」の連続講義をお届けくださいました。そして、私が「イスラーム現代史の板垣雄三さん（友雄先生と同世代の専門家）が、ズームを使ってご自宅から講義と公開討論をしているのを見ました」とお知らせしたところ、すぐに聖書講座のズーム配信の意義を認めて、基本操作の方法まで覚えてくださいました。そもそも、友雄先生とお話ししていると、時事的なトピックや、時代時代の流行りことばが、会話の中に飛び出してくるため、年齢ギャップなどまるで忘れて話し込んでしまいます。新しい考え方やテクノロジーに対して、すべてを受け入れるということはなくとも、一切拒絶というお考えはしない方だったと思います。

友雄先生は生涯現役の学者であったと感じさせるエピソードがあります。先生がお亡くなりになる直前の聖書講座で、創世記 1 章 26 節「さあ、我々に似せて人間を造ろう。」が取り上げられました。この部分には「神は一人のはずなのに、なぜ『我々』と複数になっているのか」という問題が含まれています。友雄先生が 2004 年に出版されたご本に、友雄先生がこの問題についてお書きになっているのを知っていた私は「もう読んでいますよ」という顔で先生のご説明を聞いていたのですが、友雄先生は、なんと、2004 年当時の自説を否定して、新たなご

見解を述べられたのです。創世記の書き手は、当時の、王を支配者とする社会体制の中に生きた人間であり、その書き手の知っている「王のあり方」が記述に反映しているはずである。彼の知っている王宮では、王が、たった一人でいることなどありえず、いつも多くの人に囲まれていたであろう。天の王宮にまします神と神を取り囲む天のみ使いたちという情景を、「我々」という記述から読み取ることはできませんか。このようなご説明でした。90年もの間、聖書を読み続けた方ですから、本当に驚きです。私が石田夫妻から受けた影響はとても大きく、感謝に絶えません。

石田先生の思い出

長門石 幸子

「バッハの森に一度いらしてくださいね」と石田一子先生にお誘いを受けてから40年後の今年、初めてバッハの森にやってきました。1月18日開始の石田友雄先生の「歴史書・聖書入門」に出席するためです。聖書を客観的にキリスト教文化の原点として学ぶというもので、今までとはまったく異なるアプローチは、まさに目から鱗のレクチャーで時にヘブライ語そのものに踏み込む奥深いものでした。創世記1章と2章を比較しながら、旧約聖書が何年もかけて編纂された書物であるということを丁寧に説明され、これからのレクチャーを楽しみにしていたところなので、先生の突然のご逝去が残念でなりません。これからは残されたご著書から学びを続けたいと思っています。

またバッハの森で、アーレント・オルガンに出会えたことは刺激的な経験です。良いオルガンは楽器そのものが教師となって、演奏解釈を教え導いてくれるのを感じます。素晴らしい楽器で演奏するしあわせを、石田先生にお伝えすると「オルガンが喜んでいますよ」と仰って下さったことが懐かしく思い出されます。石田友雄先生、一子先生の意志を汲み取り、オルガンとカンタータで貢献してゆきたいと思えます。

バッハを学ぶ同志

浪川 幸彦

石田友雄氏との「出会い」を私は思い出すことができない。氏の永年にわたる偉大なご功績には比べるべくもないが、実は私も、バッハの宗教音楽を、音楽と聖書そのものから学ぼうとの同じ動機から、氏の「バッハの森」と全く同じ時期に「名古屋宗教音楽ゼミナール」を立ち上げ、杉山好先生からの学びを中心に10年間余り続けた。私にとって石田氏は、不遜な言い方だがバッハを学ぶ「同志」だった。

学びを始めた当時、バッハ生誕300年を契機に漸くバッハのカンタータを含む全作品がレコードで聴けるようになり、新バッハ全集の刊行と共にバッハ研究も格段に進んだ。故磯山雅氏の「バッハ魂のエヴァンゲリスト」が発刊され、ベストセラーになったのもこの年である。今から想うと、まさに隔世の感がある。

考えると、石田氏に実際にお目にかかったことはたった二度しかない。しかしバッハを通じて与えられた心の絆の深さに改めて驚いている。初めてバッハの森に石田氏を訪ねた折、玄関の訪問者名簿の最後に「三笠宮崇仁」と著名があった。またこのとき生まれて初めてハンドベルを手に取り、一緒に演奏した。忘れ得ぬ思い出である。

石田先生の思い出

野末 明子

6月29日に、石田友雄先生の追悼コンサートを拝聴しました。天井の高い木造アーチのホールはすばらしい反響でした。

石田先生は、私の大学時代の恩師でした。古代オリエント史の授業では、とても厳しい先生でした。そんな先生がバッハの合唱団を作り、地域のコミュニティ作りをしたいという夢を語り、40年前に、バッハの森を建てたのでした。初期の頃私も少し関わらせていただきました。

2016年に、日本オリエント学会の初代会長だった三笠宮崇仁様が亡くなられ、急に石田先生がお元気かどうか気になり電話しました。その後数回、バッハの森で開催された聖書の勉強会に参加させてい

ただきました。80代の石田先生は、相変わらずお元気でエネルギー満ち満ちていましたが、学生時代ほど怖い先生ではなかったです。

追悼コンサートをお聞きして、石田先生が生涯をかけて情熱を傾けた教会音楽・バッハ・聖書への熱い思いが脈々と受け継がれ、コミュニティとして花開いたのではないかと感じました。

ありがとうございました。

バッハの森から始まったつくばの生活

平賀 邦子

結婚を機に東京から移ってきた当時、ここつくばは鉄道などの連絡もなく、陸の孤島とも言われていました。もちろん知り合いもなく不安ばかりのスタートでしたが、夫の「つくばにはバッハ合唱団(当時)がある」という言葉に勇気を得、思い起こすと、私のつくばでの歩みは、友雄先生と一子先生から始まり、豊かな時を過ごしてまいりました。

友雄先生は、精神の豊かさを求めるべく、歴史の中に人々の心の糧として積み上げられてきたコラールを身近な存在になるべく邦訳され、そしてそれは次第に私たちの心の奥底にまで入り込んでいきました。私はピアノが専門ですが、音大ではおよそ触れないような、音楽が持つ力に思いを新たにしてみました。そして、音楽がいろいろな意味で大きな広がりを持って世の中に浸透していく力を持っていることに目が開かれる思いでした。

お別れは辛いことで、長年のいろいろな場面が走馬灯のように思い起こされます。紙面がないのが残念ですが、両先生が培われてきたもの、私たちの中に育ったもの、そしてそれが今後の世の中に生きて伝えられますよう心から願っています。

最後に両先生に心から御礼を申し上げます。そして、天国で見守ってくださいませよう。

44年の学びと感謝

平賀 啓二郎

石田友雄先生と一子先生が創設された活動からバッハの音楽の奥深さとその精神・歴史的な背景を学

び、喜びと慰めを与えられたことを深く感謝致します。

私は十代からバッハの器楽曲に惹かれ、高校の授業で合唱した BWV212 の一部では、対位的な難しさと美しさを強く感じました。しかし教会カンタータや受難曲は、いわば「楽器と人声の合奏」を聴く状態(十分素晴らしいのですが・・・)でした。

それが先生ご夫妻の創立された合唱団への参加で一変しました。友雄先生は原詩と工夫された訳文・歌詞文とを対比させ、詩文に込められた意味が音楽表現と密接に結びついて深い感情を表現していることを、また一子先生はそれが関連のオルガン音楽にも表されていることを教えて下さいました。さらに、その根底にある福音書の記述と宗教改革の時代背景・精神とを示し、バッハの音楽は時代を超えて伝えられる深いメッセージを含んでいることを教えて下さいました。

以上は石田先生ご夫妻が与えて下さったことへの個人体験であり、お教への総体は遥かに多面的で深く大きいと思います。その精髓が今後も多くの人々に受け継がれていくことを強く願っています。

心が燃える時間

比留間 恵

4月2日友雄先生は、一子先生のオルガン演奏録音を聴きながら息を引き取られました。あれから50日が経とうとしています。

振り返れば、私が「バッハ」という名に惹かれ、ひよいと敷居をまたいだのが1990年の春頃。通い始めて間もなく、「ここは音楽をするところではなく、その背景を学ぶところですね」と、両先生に面と向かって言ったことがあります。お二人は声を出して笑い、否定されませんでした。以来、友雄先生のご指導は、ドイツ語は勿論のこと、私が読んだこともない聖書や、習ったこともないラテン語、教科書でちょろっとかじっただけのオリエントの歴史、果ては、ヘブル語(流石に、これは私の手には余りましたが)にまで及び、その熱意は、一時も冷めることなく続きました。一緒に学ぶ仲間がいなかったら、とっくに音を上げていたと思います。でも、確かに、心が燃える時間でした。

先生が熱心に続けられてきたことをもう一つ挙げるなら、日本語訳による「コラール斉唱」でしょう。

先生は訳を度々見直されたため、気を抜くと改定前の歌詞で歌ってしまうこともしばしば。先生訳のコーラル集をまとめる計画について、何度も話し合いましたが、結局、実現には至りませんでした。今でも、これが心残りです。

最後に、私が一番バッハの森らしいと思うことについて。それは、聖書と音楽を通して、人間や社会を考えていく姿勢だと思っています。友雄先生がバッハの森をどのような場所として考えていたのか。時々ポツリとおっしゃっていたことを思い出します。「こういうこと考える場所が必要なんだよね」と。



バッハの森創立記念コンサート参加者と
2024年3月17日

思い出と感謝

丸山 妙子

30年前、友人の紹介でバッハの森を知った。当時はまだエクスプレスもなく、東京駅からバスでつくばへ、東光台まではタクシーで、時間もお金も掛かった。

こうして5年間ほど、石田友雄先生の聖書解釈に基づく音楽講義を学びに通った。合宿をしての合唱にも参加させて頂き、一子先生にオルガンも教えて頂いた。

その学びは、音楽教師であった私はすぐに生徒に還元し、稚拙ながらバッハの「モテット」や「カンタータ」をオルガンと弦楽器付きで歌うことが出来

た。

日本音楽にも精通する必要があった私はその学びの為に、バッハの森から遠ざかっている間に、残念な訃報を知ることとなった。

全てが永遠ではないことを今更ながらに思う。しかし自分の心にも生徒達の心にも友雄先生の、また一子先生の魂が伝わっていることも思う。

6月29日の追悼コンサート。アーレントオルガンの響きの中に先生ご夫婦の素敵な笑顔があった。全てが感謝と思い出である。

質問があります

三縄 啓子

友雄先生と一子先生は、いつもご一緒という印象があります。30年前、マタイ受難曲の公開セミナーで初めてバッハの森の門を叩いた時も、お二人並んで「よくいらっしやいました」と迎えてくださいました。その時の「カンタータを歌ってみたいです」という私の希望を叶えてくださり、翌年クワイア以外も参加可能なワークショップを計画してくださいました。BWV4番「キリストは死の縄目につながれ」でした。コーラルがルター派教会の讃美歌である事、その旋律の多くがグレゴリオ聖歌が元になっている事、そしてコーラルとカンタータの関係を教えてください、とても新鮮な体験でした。それから片道2時間かけて、つくばまで通うようになり様々な学びがありました。嵐の晩、友雄先生・一子先生と私だけのラテン語教室なんていうのもありました。最近では、聖書を歴史書として読み解く時間が好きでした。

今年になってから友雄先生に伺いたい事が沢山あったのです。

1. 私が子どもの頃、先生のご自宅付近を通り祖師ヶ谷小学校に通っていた事が判明、数年前にご近所のお団子屋さんの話題になった事がありました。武蔵野の面影が残っていた頃の祖師ヶ谷のお話を聞いてみたい
2. テルアビブで体験された事を聞いてみたい
3. 昔、テレビドラマで好きな劇中歌があり、後年それがイスラエル民謡らしい事を知り、つい最近カタカナ表記のヘブライ語歌詞付き楽譜を発見。その曲をご存知かどうか

4. 聖書に、平和実現のヒントがあるかどうか等々

いつの日か、再びお目にかかれたら質問攻めにしようと思っています。

海のように大きい石田友雄先生

サクバット奏者 宮下 宣子

石田友雄先生には、響きの素晴らしい奏楽堂と素敵なアーレントオルガンをお借りして、古楽金管・合唱セミナーを何度も行わせて頂いたご縁で、大変お世話さまになりました。お会いする度に、そのお人柄の海のような大きさ、深さに感銘を受けておりました。

セミナーの発表会後に、キリスト教に造詣の深い石田先生ならではの、素晴らしい音楽のお話を、我々参加者にわかりやすく、熱を込めて語って下さった情景が強く心に残っております。そして、その時に石田先生の音楽への、また奥さまへの大きく深い愛を感じたことは、私の人生において特筆すべき出来事となっております。

石田先生が亡くなられたとしても、その素晴らしいご研究の成果や精神は、日本に根を張ったキリスト教音楽、バッハの音楽として大切に受け継がれて行くことでしょう。本当にありがとうございました。



古楽金管・合唱セミナー参加者と

バッハの森は自分自身と深く向き合える空間

宮本 とも子

世界的な学者としての石田友雄先生について、私はその全体像を把握できませんが、先生が、最愛の妻／オルガニストの一子先生から引き継がれたバッハの森の記念奏楽堂やそれに続く広い空間を日々整え続けられていた「規律正しい日常」に17年間オルガンの学びのために温かく迎え入れて頂きました。

この間、J.S.バッハがオルガンの為に作曲したコラール作品の、ほぼ全てのコラール歌詞全節を解説していただき、J.S.バッハが如何にこれらの言葉を音楽作品の礎として創作したかを丁寧に教えて頂きました。

同時に、先生は、「僕にできるのは、この建物を良い状態に保つこと」そして、「この素晴らしい建物が、使われなくなるのはもったいない」と良く言われ、その解決のために「観光バス誘致作戦」もご提案して、大賛成して下さいました。矢先のご逝去でした。

バッハの森の創設者ご夫妻がお二人とも「天の王国」に旅立たれてしまった今、地上に残された文化遺産を「ここは、日常から離れて、ご自分自身と深く向き合える空間ですよ」とご紹介していけるよう、微力ながら最善を尽くしたいと思います。

石田友雄先生の魂の平安をお祈りしつつ。

手紙

森 快士朗

友雄先生、お久しぶりです。ハンドベルリンガーズの森快士朗です。始めてお会いしたのは今から8年ほど前でしょうか。8年前初めてお会いした時に、いつも笑っている優しい人だなと思っていたことをよく覚えています。ほとんど毎回ハンドベルの練習の終わりに来てくれて、たくさん褒めてくれました。とても嬉しかったです。

毎回冬のコンサートの後に行われる友雄先生の誕生日会。毎回幸せそうな顔をしていた先生を見て、自分も嬉しくなりました。

この8年間のことは、これから先も記憶に残り続けるいい思い出になると思います。それを作ってく

れた先生には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

友雄先生を偲び

和田 純子

1993年、私は歴史的楽器の研鑽のためブレーメン音大の古楽アカデミーに学び、北ドイツの田舎町に住んでいた。北ドイツはハンザ同盟で栄え、今でこそ陸の孤島だが、それゆえ戦火を免れシュニッガーをはじめオルガンの銘器が多数残っている。その修復を一手に担い、現代に甦らせたのがバッハの森のオルガンを製作したアーレント氏である。アーレント氏の工房は北ドイツのレアにあり、フォーゲル氏を通じて親交を結んだ。バッハの森との繋がりもそこから始まって、帰国後にオルガンコンサートをさせていただいた。その後クワイアの指導を任されたが、選曲は友雄先生。しかも先生こだわりのバッハのカンタータ。バッハほど言葉のメッセージを音楽で表現した作曲家はいないが、そのため難しい音型、和声、音程を駆使する。それをクワイアは原語（ドイツ語）でフェスティバルまでに心身へ落とし込む。コラールの歌詞は友雄先生が邦訳し解説されていた。最近、久しぶりにバッハの森で開催されたコンサートを拝聴した。友雄先生が邦訳された復活のコラールを会衆がオルガンと共にユニゾンで高らかに歌った。これこそ友雄先生へのレクイエムだと感じた。

石田友雄先生の思い出

渡辺 恵子

友雄先生に初めてお会いしたのは、私が二十歳の頃。石田一子先生に招かれて、東京純心女子短大オルガン科の先輩後輩と共に、筑波の官舎のご自宅へお訪ねした時でした。ささっとお皿洗いなどされて、仲良くお暮しで、理想のご夫妻と思いました。

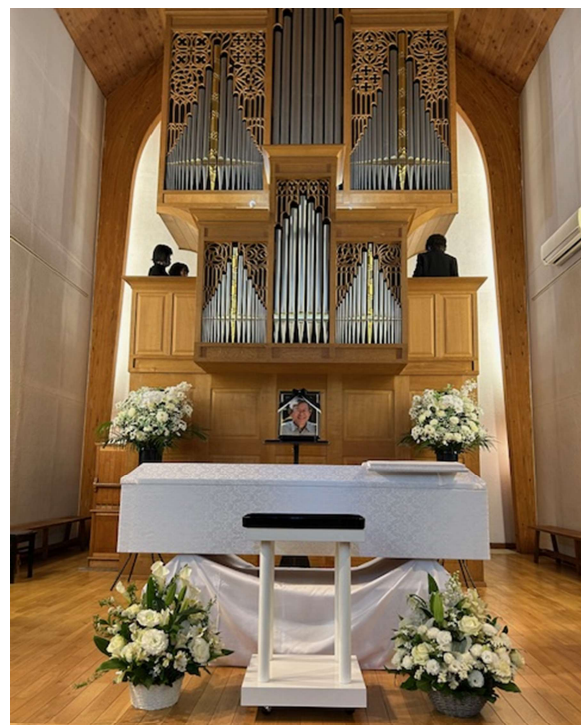
翌年春、私は筑波へ転居し、一子先生からオルガンと礼拝音楽などを学びつつ、筑波大学で友雄先生のユダヤ教史（旧約聖書概論）の講義を聴講始めました。（諸事情で、途中で筑波を離れることになり

残念でした）

「バッハの森」を始められる前の、筑波大の公開市民講座「バッハカンタータを歌う会」にも参加しました。バッハカンタータ 106 番「神の時は最良の時」でした。

友雄先生の若々しい張りのあるお声で聖書のお話が生き生きと語られ、バッハの音楽が脈々と息づいてきて、本当にわくわくとカンタータを歌わせてもらいました。

その頃も、そして晩年も、少年のような友雄先生でした。もう一度、あのお声を聴きたかったです。今は、先に天へ帰られた一子先生と再会して、語り合い笑いあっていたらいいことでしょう。ご平安をお祈りします。



石田友雄先生 お別れ会

2025年4月12日 バッハの森記念奏楽堂

バッハの森に寄せて

牧山 亮

バスバリトン歌手の牧山亮と申します。2025年6月29日(日)バッハの森で行われた教会音楽コンサートで合唱とソリストを務めました。

私はこの時までバッハの森の存在を知らず、過ごしてきました。そんな私がどうしてこのコンサートに出演することになったかについてお話しします。コンサートから遡ること4ヶ月前のある日、テノールの小沼さんからコンサートに出演してくれないかとオファーをいただきました。小沼さんは昔から仲良くしてもらっている演奏家ですが、今は同じ東京混声合唱団というプロ合唱団に所属しており、音楽以外の色々な話もよくする仲です。オファーをいただいた時、バッハの森の存在を知らなかった私は小沼さんにどのような場所なのか聞きました。小沼さんは一言「とても素晴らしい空間だよ。きっと牧山くんも気に入ると思う。」と言いました。

僕は最初この言葉の意味があまりうまく理解できず、稽古初日、期待と若干の緊張を抱えてバッハの森に訪れました。まずバッハの森ではオルガニストの宮本とも子さんにお会いしました。宮本さんに館内を案内してもらって、バッハの森の「素晴らしさ」をすぐに理解しました。立派なオルガンやチェンバロ、クラヴィコードが常設されている環境は、都内でも珍しく、このつくばの地にこのように傑出した楽器と、記念奏楽堂がある事実には衝撃を受けたのでした。

バッハの森の創設者である石田先生ご夫妻は、私財を投じてこのバッハの森を造られたとお聞きし、ご夫妻の情熱に敬意を表しました。

そしていよいよ稽古が始まりました。今回演奏するのは T.L.de. ヴィクトリア作曲《Missa Dominicalis》よりキリエとグロリア、J.S.バッハのカンタータ 77 番《Du sollt Gott, deinen Herren, lieben》全曲と、カンタータ 97 番《In allen meinen Taten》の元コラールとアリアの抜粋などです。バッハの森の教会音楽コンサートのためには、40年間にわたって創設者の石田先生が楽曲の歌詞内容について指導にあたられていたのですが、残念ながら先生は先日急逝されてしまわれました。しかし、合唱団のメンバーはその状況でも自身の力を最大限に活かして練習や学びに精を出しておられ、

改めて石田先生の築いたバッハの音楽的精神が団員の皆さんにも根付いているのだと感じました。

石田先生ご夫妻はバッハの森に沢山の有形無形の遺産を残されました。それらを守りながらも、バッハの森が今後さらに発展することが大事であると思います。私もその一助になればと思っております。最後に当日の演奏曲目と演奏者のお名前(敬称略)を記載して結びとさせていただきます。

演奏曲目

- J.S. バッハ 《Dies sind die heiligen zehn Gebot》 BWV 678(オルガン独奏)
- T.L.de. ヴィクトリア 《Missa Dominicalis》より Kyrie, Gloria
- J.S. バッハ 《Dies sind die heiligen zehn Gebot》 BWV 678(ハンドベル)
- コラール《こは聖き十の戒めなり》(会衆斉唱)
- J.S. バッハ 《Du sollt Gott, deinen Herren, lieben》 BWV77(器楽・合唱・ソリスト)
- コラール
- 《すべての業に》(会衆斉唱)
- J.S.バッハ 《In allen meinen Taten》 BWV97 より 抜粋(器楽・合唱・ソリスト)
- J.S.バッハ 《Duetto No.2 in F major》 BWV803 (オルガン)

演奏者

合唱：バッハの森クワイア

ソプラノ：中村 美幸、三縄 啓子

アルト：岩渕 倫子、廣瀬 綺菜、松岡 智子

テノール：深谷 律雄、山中 盛男

バス：及川 正尋、小野 基、別所 直樹

ソリスト

ソプラノ：鈴木 美紀子

アルト：岩渕 倫子

テノール：小沼 俊太郎

バス：牧山 亮

ヴァイオリン：桐山 建志

オーボエ：尾崎 温子

トランペット：松野 美樹

オルガン：宮本 とも子

ハンドベル：バッハの森ハンドベル・クワイア

岩渕 倫子、金谷 直美、當眞 容子、別所 直樹、

三縄 啓子、山崎 愛英、横田 博子



教会音楽コンサート参加者
2025年6月29日

「こは聖き十の」

2025年6月29日 教会音楽コンサートの主題コラールの一つ

I. こ は き よ き と お の 主 の い
ま し め な り。 シ ナ イ の や ま に
て、 モ ー セ う け た り。 キ リ エ ラ イ ス。

- | | | | |
|--|--|---|--|
| 1. こは聖(ト)き十(ト)の
主の戒めなり。
シナイの山にて
モーセ受けたり。
キリエライス。 | 2. 我は唯ひとり
汝(ケ)れの神、主なり。
我に寄り頼み、
我、愛すべし。
キリエライス。 | 3. 御名を汚すこと
行なうべからず。
主を誉むべからず、
御言葉受けず。
キリエライス。 | 4. 七日(ナ)目を聖(ト)め、
働かず休め。
御神の御業(ミツ)を
汝(ケ)がうちに受け。
キリエライス。 |
| 5. 汝(ケ)が父と母を
敬(ウヤ)い従え。
彼らに仕えて
長く生くべし。
キリエライス。 | 6. 怒り憎しみて
殺すことなかれ。
忍びて敵にも
良きことをなせ。
キリエライス。 | 7. 夫婦(オト)の契りを
清らかに保ち、
操(ミツ)を堅くし、
礼節、守れ。
キリエライス。 | 8. 盗みをはたらき、
奪うことなかれ。
貧しき者らに
施しをせよ。
キリエライス。 |
| 9. 偽りの証(アガシ)
立つることなかれ。
無実の隣人(トナリ)の
恥、覆うべし。
キリエライス。 | 10. 隣人(トナリ)の妻、家、
むさぼるべからず。
隣人(トナリ)に良きこと
願いて折れ。
キリエライス。 | 11. これら戒めに
おのれの罪、知り、
御神の御前に
生きる道、知れ。
キリエライス。 | 12. 主イエスの仲保(カガ)チ、
おのが業(ツガ)により
無益となす者、
御怒り招く。
キリエライス。 |

歌詞：Martin Luther 1524

訳詞：石田友雄 (2006年／2010年)

旋律：“In Gottes Namen fahren wir” (15世紀) Erfurt 1524

2024 年度会計報告

(2024. 4. 1～2025. 3. 31)

(単位:円)

(1) 収入の部	
基本財産受取利息	147
特定資産受取利息	0
受取会費(賛助、維持、学生)	660,000
事業収益	
コンサート	78,500
公開講座	95,500
研究会	1,127,000
ワークショップ	323,700
音楽教室	183,000
楽器使用料	167,800
収益事業収益(貸家賃、貸会場)	1,372,700
受取寄付金(一般寄付)	132,998
雑収益(管理棟家賃、施設利用、その他)	725,236
経常収益計	4,866,581

(2) 支出の部

給与手当	600,000
支払報酬(会計事務所、防火設備)	532,776
旅費交通費	70,676
通信運搬費(郵送料、電話、ネット関係)	158,937
什器備品費(防火設備)	253,880
消耗品費(事務用品、防火設備)	432,119
修繕費(建物修繕、楽器メンテナンス)	205,240
修繕費(植栽、補修)	547,250
印刷製本費(通信、封筒、ちらし)	56,004
光熱水料費	620,657
賃借料(地代、機器リース料)	1,160,850
火災保険料	129,800
諸謝金	580,000
租税公課(固定資産税、法人税、印紙)	403,162
雑費(コピー使用料、PCシステム管理費)	208,630
負担金	6,820
経常費用計	5,966,801
当期経常増減額	△ 1,100,220

指定寄付収支

土地地上権積立

[収入]		[支出]	
前期繰越	0		
寄付	594,000		
利息	0	次期繰越	594,000
合計	594,000	合計	594,000
	(今後の予定) 2026年	地上権更新	1,100,000

建物維持・修理

[収入]		[支出]	
前期繰越	252,587	植栽整備 (鈴木造園)	168,300
寄付	298,813	樹木伐採 (鈴木造園)	133,100
		防火設備 (柴木材)	250,000
		次期繰越	0
合計	551,400	合計	551,400

オルガン修繕

[収入]		[支出]	
前期繰越	757,774	クラヴィコード スタンド	89,740
寄付	59,000		
利息		次期繰越	727,034
合計	816,774	合計	816,774

日誌 (2025. 1. 1～ 3. 31)

- 1. 10 訪問 柴英世氏 (防災アドバイザー)
- 1. 11 訪問 柴英世氏、松田達明氏 (満和電気(株))
クリスマス飾り片付け 4名
鈴木造園 植栽整備
- 2. 18 消防立ち入り検査 10名
- 2. 28 パイプオルガン体験プログラム (桐朋学園大学)
4名
- 3. 1 消防訓練 15名
- 3. 15 話し合い 17名
- 3. 22 話し合い オルガン音楽鑑賞会は中止
- 3. 23 [ステファニー・ジョーンズ演奏会]

公開プログラム

コラール・カンタータ入門

- 1. 25 笠間きよ子 参加者 8名
- 2. 8 宮本とも子 参加者 8名
- 2. 22 安西文子 参加者 9名
- 3. 8 金谷尚美 参加者 6名

学習コース

バッハの森クワイア 1. 18 休会、1. 25/6名

2. 1/5名、2. 8/7名、2. 15/7名

2. 22/5名、3. 1/8名、3. 8/6名

3. 15/7名

オルガン音楽研究会 1. 17/6名、1. 31/9名

2. 14/5名、2. 28/6名

オルガンクラブ 1. 24/3名、2. 7/2名

2. 21/3名、3. 7/2名

歴史書・聖書入門 1. 18/7名、1. 25/8名

2. 1/5名、2. 8/6名、2. 15/6名

2. 22/7名、3. 1/10名、3. 8/5名

3. 15 中止

ハンドベル・クワイア 1. 25/6名、2. 8/5名

2. 22 休会、3. 1/6名

ハンドベル・リンガーズ 1. 26/9名、2. 16/11名

3. 16/10名

教室プログラム

クラヴィコードレッスン 1. 30/2名

チェンバロレッスン 1. 30/4名、2. 28/5名

オルガン体験プログラム (公開プログラム)

2. 28/5名、3. 1/2名

オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習

1. 15/1名、1. 17/6名 1. 18/2名

1. 21/1名、1. 23/1名、1. 23/3名

1. 25/2名、1. 28/1名、1. 30/2名

1. 31/5名、2. 7/2名、2. 8/2名

2. 13/1名、2. 14/1名、2. 15/1名

2. 20/2名、2. 21/3名、2. 25/1名

2. 27/1名、2. 28/4名、3. 1/2名

3. 5/1名、3. 6/2名、3. 7/3名

3. 8/2名、3. 22/1名、3. 23/1名

寄付報告 (2025. 1. 1～6. 30)

一般寄付

6名と1グループの方から 523,000円のご寄付をいただきました。

建物維持積立寄付

23名の方から 115,500円のご寄付をいただきました。

お香典として

2名の方と1社から 95,000円のご寄付をいただきました。